

ファミリーストランに盛り塩は似合わない。

「……ていうかゾンビに盛り塩って効果あんの？」

「あるかなしかで言ったら、なし」

「じゃあ無駄じゃん。意味ねーじゃん。なんで塩盛ってるの？」

「そういうアホでもできるアホなツツコミはいいからあんたも手伝えよ」

ヘッドホンをかけた予備校生に説教され、四隅の塩をチラ見ながら椅子を積む。

盛り塩がお浄めやお祓いの様式美なのは一般常識として知っちゃいる。

葬式帰りのヤツは玄関先で塩をかける。一種の厄払い、幽霊が家ん中まで憑いてこねえようにだ。

知ってるさもちろん、非常識だバカだアホだ別れたカミさんに誘われちゃいるが人間三十年ちよい生きてりやいやでも知識は増える。

だけどファミレスと盛り塩の組み合わせは実際どうなんだ？と聞きたい、激しくツツコみたい。いや、和風居酒屋ならギリギリセーフだけどさ。洋風のファミレスにや似合わねえだろ。

電気が切れた店内は薄暗い。

ライフラインは仮死状態。

至る所からぐすぐすと途切れなく嗚咽が聞こえて気が滅入る。

ポツポツと灯るあかりはまだ充電切れしてないスマホの液晶、それだけを頼りに人々は互いの顔を照らし合う。

「ホテルノヒカリなら風流だがスマホノヒカリじゃ興ざめだぜ」

スマホに縋り付きちゃ一喜一憂する顔をほかにやることもなく観察する。

ほぼ密室状態の人口密度は高く、老若男女とりまぜて取り残された客たちがそれぞれのグループごと寄り集まって世を侮み離れ小島の不運を嘆いている。

テーブル席に座った若い夫婦は真ん中に挟んだ子供がぐずるのを必死になだめ、ほんの一時間前までドリンクバーをハシゴしちや教師の悪口や共通の友人の噂話で姦しく盛り上がった女子高生は、互いの肩を抱き合い半べそだ。

端的に言って地獄だ。

いや、本当の地獄は「外」だ。

死屍累々と阿鼻叫喚どつちがマシだ？

「人は内、屍人は外……ってか。語呂わりー」

内のほうがちよつとはマシだ、断然マシだ。少なくともまだ死者は出てない。

だが陰陰滅滅はごめんこうむりてえ、こちとらシケた雰囲気が大の苦手ときてる、性分にあわないのだ。

「くそっ」

口汚く毒突いてどつかと胡坐をか。扉の外じゃ思考停止ゾンビどもがこりもせず体当たりをくりかえしその轟音と衝撃が伝わってくる。

連中飽きねえのか？

いくら痛覚が麻痺してるからってタフだことと感心する。

ドアが震えるたび寄り添う女子高生は悲鳴を上げ、怯えた子供はぎゃん泣き。

上品な白髪のお婆はポケットからとりだした数珠を手繰って念仏を唱え始める。

もしもの時の神頼み。

状況はどん底の底も抜けて最低、最悪に輪をかけて最悪。密閉され換気の悪い店内にいきれが立ちこもる。

「なんでこんなことになったんだ」

ほんの数時間前まで、ファミレスには退屈な日常が流れていた。

午後二時、昼食にはちよい遅い時間帯。

店内に疎らに散った客たちは思い思いの時間を漫然と過ごしていた。

等間隔に配置されたテーブル席には見栄えよくメニューブックが立てかけられ、よくエアコンが利いた清潔で快適な店内には弛緩した空気がたゆたっていた。

『リストランテ・バンビーナ』

それがこのファミレスチエーンの名前。

イタリア語でバンビーナは小娘、お嬢ちゃんて意味だそう

だ。立地は駅から徒歩三分、ビルの二階に入ってる。一階は全国展開してるコンビニ。夕方ともなれば学校帰りの学生の集団で盛り上がるが、時間帯がズレてる今は、およそ六割の入りでゆっくり寛げる。

手持無沙汰に見るともなく客の顔ぶれを流し見る。

むこうのテーブル席で団欒してるのは初老の夫婦と二十代の若夫婦と三歳くらいの女の子。

お子様用の高い椅子に座らされた女の子はスプーンをぶんまわしては「めっ」と母親に叱られ、祖父母が微笑ましく

見守っている。

通路を隔てた二人用の席を独占し、ヘッドホンで音楽を聴きながら参考書を広げているのは近くの予備校生だろうか。その隣はスカート丈の短いギャルメイクの女子高生二人組、スマホの画面を見せ合って笑い転げてる。

外回りの営業マンだろうか、椅子の背凭れに背広をかけた青年が携帯で上司だか取引先と話し込みながらアイスコ―ヒーで喉を潤す。

「ファミリ―がレスしてるからファミリ―レストランってか」

斜に構えた態度でずこことメロンソーダを吸い上げる。

平日の昼下がりという事もあつてか、さすがに両親と子供そろつた席は稀だ。それともそう感じてしまうのは俺個人がファミリ―をレスしてるせいだろうか。だらしなく頬杖付く。

見晴らしのいい窓際の四人掛けテーブル席を独占できるのもこの時間帯の特権だ。

嵌めこみ式のでかい窓の向こう、太陽が燦燦と降り注ぐ交差点には人と車が喧しく行き交っている。

「……いけね」

窓越しの雑踏に別れたカミさんとガキの顔をさがすのが癖になつてる。こんなところにいるわけねーのに。

大体いまガキは小学校に行つてる時間帯だ、カミさんは買い物にいくにしろ近所で済ませてめつたにこつちにてこない。だてに十年近く一緒に暮らしてねー、お互いの行動範囲は周知してる。

ストローの先つちよ噛み潰してずこ―ずこ―と吸い上げる俺の耳に、隣の女子高生の話し声がとびこんでくる。

「なにこれ」

「どしたん」

「ネットニュース見てみ、どつかの製薬会社の研究施設から新種のヤバイウイルスが流出したつて」

「なにそれヤバイじゃん。バイオハザード発令？」

「わかんないけどいま緊急記者会見やつてる」

「ヤバつ、これけつこー近くじゃん！ てかさんなヤバイ施設が電車で三駅のとこにあつたなんて知らなかつたし」
 どうでもいいが、ボキヤブラリ―が少ない。ヤバイヤバイそれつきや言つてねーぞ。しかしヤバイ事態だつてのは十分伝わってくる。

軽薄に騒ぐギャルの対角線上のボツクス席じゃ、年配の夫婦がスマホを覗きこんで不安な顔色をし、大学生グループが「マジ？」「マジっぽい」と囁きかわす。

「政府の声明だつて、危険だから家から絶対出るなつて」

「えー厚生省とかそつち系？」

「なんか大臣でできたつしよ。ヤバない？」

「パねえ」

「そのウイルスつて結局何？ 感染すると体がドロドロに溶けるとかスプラッタ？ 空気感染だったらどうしようもない」

「なんかー嘔まれると伝染るらしい？」

「それつてゾンビ……」

「B級ホラーじゃん」

馬鹿馬鹿しい、スマホ全盛の今の世の中ゾンビなんかいるかつてんだ。B級ホラーの見すぎだ。笑い話っぽく呑気に構えるギャルがふと顔を上げる。盆をさげた店員が、ハツと顔を引き攣らせ入り口を注視する。

そこに、いた。

ゾンビ一号が。

ぐちゃり。

「あーうー」

それはファミレスのガラス扉に視神経のぶらさがった眼球が直撃する音。

硬直した両手を前に突き出し。ずりずりと腐汁たれながし歩行して。ファミレスの入口までやってきたゾンビが絨毯

踏ん付けすつ転んだ衝撃で眼窩から目玉がとびだし、ガラス扉のど真ん中に貼り付いたのだ。

目が合った。

比喩じゃなく。

若い女の子の店員が無表情に深呼吸。

「きゃー……！！」

見事な声量の絶叫。俺がホラー映画の監督だったら即スクウトしてた。あの子は水泳やつてんのかもしいれない、肺活量が半端ねえ。

三々五々、さまざまな年齢層の客が散らばった店内は瞬時にパニックに陥る。

「ぎゃー……でた……!?」

「ゾンビマジやば写メつとこー!」

「バズっちゃう? ねえバズっちゃう? わーめっちゃ拡散

されてる、100万RTいけるよこれ!」

「めっちゃインスタ映えするーハリウッドの特殊メイク?」

「見てくださいおじいさん、あれはなんでしょう」

「あれはゾンビイじゃないか」

「ゾンビイとはなんでしょう」

「海外では墓から甦った死人をそう呼ぶらしいよ」

「キョンシーとはどう違うんでしょうね」

「キョンシーはゾンビの一種じゃないかい？ ほら、ナポリタンがパスタの一種なように……」

「そういえばナポリタンは日本の喫茶店発祥のオリジナル料理ってご存知です？」

「君は物知りだねえ！」

「ふふ、おじいさんには負けますよ。本家イタリアの方もびつくりですねえ」

「パパーママーあの一とおめおつことしたよ」

「見ちゃいけませんゆうちゃん！」

突然のゾンビ襲来によりファミレスは騒然。

席を立った連中が右往左往行き交い、落ち着かせようと泡食った店員がながら盆を取り落とし、ゾンビはマイペースの極みでガラス扉に体当たりをくりかえす。

あ、ノブに気付いた。夢中で引つ掻いて入つてこようとしてる。階段を上り、続々新手が押し寄せる。

「やだ、喰われる？」

「映画の撮影かよ」

「いえ、そんなことは聞いてません許可だした覚えもありません！」

「おいおいしやれになんねーぞ」

「いまニュースで嘯まれたらゾンビ化するって……」

「は？ なにそれふざけ」

「こんな店いられっか、とつとうちに戻るぞ！」

いきりたつた学生どもが店内を突つ切つてドアに殺到、俺もおもわず腰を浮かす。

「おいそれ死亡フラグ……」

「「ぎゃー……!!」」

いわんこつちやない。

目の前でくりひろげられるスプラッタな光景に悲鳴が連続、俺もおもいつきり顔を背ける。

哀れで愚かな学生に合掌。

ドアを開け放つて飛び出したところをゾンビの群れに襲われてジ・エンド……頭からまるかじりされて埋もれていく。

「馬鹿野郎、策も何もなく正面から突つ込んでくつて自殺行為だろ」

「漫画でも映画でも集まりを抜け出して孤立したヤツが真っ先に狙われるのがホラーのお約束だ」

「ん？」

期せずして独り言に相槌が返つて向き直る。ヘッドホンを外しながら呆れ顔の予備校生。目が合つて「あ、ども」と軽く会釈する。

「なんか大変なことになってるな」

「そんな他人事みたい……今まさに巻き込まれてんのに。」

「あんた事態の重大さわかってる？」

「何コイツ……年下のくせにえらそう……」

「すつごい炎上してる！ あちこちでゾンビ大発生だって！」

「グロ画像キタ！ 嘘、発信地隣町？」 スマホをふりかざ

してギャルが喚き、祖父母と若夫婦と孫の一家が寄り添い、

品のよい老夫婦がコーヒーをすすらずと啜る。

「おじさんなんて名前」

「ちよつと待てだれがおじさんだ俺はまだ32だ」

「立派におじさんだろ」

「ちっ……七瀬。下は」

「そっちはいいや」

「あつそ。坊主は？」

「八尋」

「八尋……ね」

「いま女みてえな名前だつて思ったろ」

「とは思ってねえけど、上と下どつちかなと思った」

「ご想像にお任せ」

「ふたりあわせて七転び八起きだな」

「あわせる意味がわからん」

「言ってる」

話していると少しは気が紛れる。

俺はさっきの意趣返しをする。

「お前こそ落ち着いてんじゃん、事態の深刻さわかってる？」
「わかってるって」

ヘッドホンを肩にかけた八尋がぼかんとスマホを開いて俺の鼻先に突き付ける。

SNSのタイムラインが凄い速さで流れていく。ゾンビに齧り付かれた行人の動画が大量に出回り、SOSを求めるツイートが同時多発的に大発生で目が滑る。

大学生がゾンビに齧られた時はショックで思考が止まったが、おかしなものでパニックに陥ったSNS炎上図に、ひしひしと実感がわいてくる。

目の前で起きてる現実よりネットの慌てつぶりで事の大きさを悟るなんて、我ながら現代の皮肉に毒されてる。

「あつちのギャルが騒いでんの聞いてたろ、近くの施設で事故がおきて新種のウイルスがばらまかれた」

「パンデミックじゃん。で、感染するとああなつちまうの？」
窓の下でも異変が起きてる。人々が交差点を逃げ惑い、車を乗り捨てて運転手が逃げ出す始末。

よく見ると緑がかった肌の変質者が紛れてる。

ファミレスは陸の孤島と化した。

逃げ場はない。下手に逃走を図ればさっきの大学生の二の舞だ。合掌。

予備校生……八尋が領いてスマホをしまい、俺は入れ違い

にスマホをとりだし短縮にかける。

「くそっ、でねえ!」

画面に表示されたカミさんの名前に舌打ち。

アイツ今どこだ、無事なのか?

順当に考えりや家で子どもを待つてははずだが……
子供は? 下校中じゃねえのか、もし襲われてたら……

「!? おいアンタっ、」

「離せよ、カミさんと子どもがヒーロー登場を待つてるんだ!」

「いまでてつたら無難に死ぬぞ、それも頭からまるかじりで眼窩に蛆湧かせる最低の死に方だ!」

「ぐっ……だつたらどうしろつてんだ、家族を見捨てろつてのか!」

「落ち着けて、奥さんと子どもだつて今頃避難してるかもしれない。スマホにでねーのは移動中で余裕がないからかもしれねーじゃん。この騒ぎだ、自衛隊もとっくに出勤してる。民間人を守るのが仕事だ、奥さんと子どもも安全なところに匿われてるさ」

「市民会館が安全な場所か? 学校の体育館が!」

「俺にキレたつてどうしようもねーだろ、頭冷やせよ!」

そうだ、八尋のいうことはもつともだ、絶対的に正しい。今出てつても無駄死にだ、妻子と再会を果たす前にジエン

ドだ。

奥から出てきた店長っぽいギャルソンの中年男が、悲鳴と嗚咽の渦巻く店内に声を張つて呼びかける。

「皆さん落ち着いて、私の言うことを聞いてください!

いま外に出るのは危ない、バリケードを築いて立てこもりましょう」

「閉じこもつてどうすんの? だれかむかえにきてくれるの?」

「たすけてつてツイートした……ママとパパにも電話かけた……」

「消防と警察にも連絡したけど回線繋がりにくくて」

「見ろ、ヘリコプターだ! マスコミ……いや、自衛隊?」
サラリーマンが窓の外を指さし、残りの連中が息せききつて押しかける。俺も釣られて空を仰ぐ。旋回するプロペラ、

ぼつてりした躯体……

遙か上空をのんびり横切つていく何機ものヘリコプターに希望を見出し、残された客の顔に安堵と不安が交錯する。

おーいおーいと間延びした声で呼びかけ手やハンカチを振りたくる客に、店長が力強く言い聞かせる。

「大丈夫、私達がここに残つてことは向こうも知つては……じきに助けがきます、それまでの辛抱です」

それが数時間前の出来事だ。